

<p>(1) 課題名</p> <h2 style="text-align: center;">知的基盤プログラム</h2>	<p>③ サンプル保存方法の調査およびその開発 将来の分析に留意した、サンプル及び比較対象化学物質の保存方法について調査を行い、サンプルの保存に必要な技術を開発し、保存方法を確立する。</p>
<p>(2) 目的</p> <p>科学的知見の進展に応じ、新たなリスクが判明しうると言う化学物質管理の特性を踏まえ、 で取得したサンプル等の保存体制を整備することにより世界に発信しうるスペシメン・バンキングシステムを構築し、将来の「安心」に備える。</p>	<p>④ 分析手法の調査、体系化及びその開発 化学物質の(将来可能となるであろう)分析技術の調査及び将来問題となりそうな化学物質関連の問題(健康問題、社会問題等)について調査を行い、必要とされる分析技術の方向性を検討し、必要に応じ開発を行う。</p>
<p>(3) 背景、必要性</p> <p>将来科学技術や環境影響調査等の科学的知見の進展により、化学物質のリスクについて新たな対応が必要となることが予想される。例えば、オゾン層を破壊する原因であるフロン、内分泌攪乱問題の原因として検討されている化学物質等は、当時の科学的知見では有害性は認められなかったものの、その後の科学技術や環境影響調査の進展により、新たな有害性が指摘されたものである。</p> <p>このように化学物質のリスクについては、科学的知見の進展により、従来問題なしとされていた物質について対応が迫られることが多々ある。その際に、過去何十年にわたるこのような観点からのサンプル及びそのサンプルの情報(病歴、生活環境等)を利用できることが、新たな知見の収集を速やかにし、議論の正常化を助けることとなる。このように、将来の化学物質のリスクを適切に管理するためには、サンプル及び関連データの蓄積を行うための知的基盤(スペシメンバンキング)の整備が必要である。</p>	<p>⑤ サンプル管理体制の確立及び取得データ利用のためのシステム開発 サンプルに関する情報及びサンプルから得られたデータを管理することで、保存サンプルを利用しやすいシステムを構築する。そのため、既存のサンプル保存機関との連携を行い、サンプル保存センタの設立を目指す。</p>
<p>(4) 環境分野への貢献度</p> <p>現時点での貢献は評価しがたいが、将来、科学的知見の進展に応じて、新たな化学物質リスクへの対応としては不可欠として考えられ、貢献度は高いと評価される。</p>	<p>(6) 全体計画 平成14年度から5年間</p> <p>(7) 所要金額 約70億円</p> <p>(8) 実施体制 独立行政法人等の公的研究機関のネットワークにより実施する。</p> <p>(9) 今後5年間の目標、10年間の見通し サンプル選定は2004年度まで、サンプルの保存技術は2004年度まで、分析手法及びデータ活用のためのシステム開発は2006年度までに確立し、2007年度以降は継続的にサンプルの収集とシステムの運用を行う。</p>

(5) 研究開発内容

① サンプル選定手法の開発

将来の分析で必要とされと考えられる大気・土壌・水・生物・食料・人体等のサンプルパーツ及び比較対象化学物質を選定するため、理論(統計学的根拠等)に基づき選定手法を確立し、更には追加知見の収集を行う。

② サンプルの収集方法の策定及びサンプル収集体制の確立

対象サンプルの既存収集状況の調査を行い、他機関との連携を含めたサンプルの収集方法を策定する。

また、サンプル収集体制を確立し、サンプル採集を行う。